

だれもとりにこぼされない場が
成り立つためにファシリテーターに求められる在り方・関わり方は、ワークショップだけじゃなく、まちでの暮らしにもプラスのようだった。

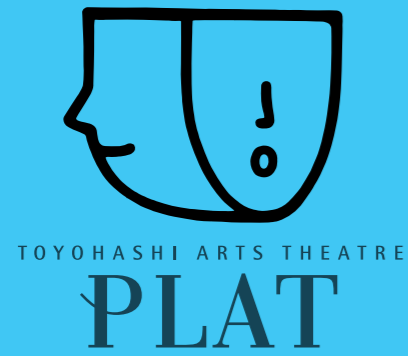


PLAT

穂の国とよはし芸術劇場
TOYOHASHI ARTS THEATRE

～劇場のワークショップファシリテーター養成講座～





だれもとりにこぼされない場が
成り立つためにファシリテー
ターに求められる在り方・関
わり方は、ワークショップだ
けじゃなく、まちでの暮らしに
もプラスのようだった。



PLAT
穂の国とよはし芸術劇場
TOYOHASHI ARTS THEATRE

～劇場のワークショップファシリテーター養成講座～



穂の国とよはし芸術劇場は、東三河市民のための芸術文化交流施設として2013年4月30日に開館し、2020年で8年目を迎えました。演劇・舞踊・音楽等の芸術文化の振興と、芸術文化を活用した市民の交流や、創造活動の活性化を目的としています。

その中でも公共の劇場として私たちが考える使命のひとつに、教育普及活動を推進し、市民の芸術文化活動の拠点となるということがあります。市民の皆さんに新しい心の世界の広がりを紹介するために芸術の普及事業を積極的に進めることはもちろんですが、ワークショップ等の教育普及活動を通して舞台芸術を市民生活へ活用する方法を提案することも、芸術に対する興味を呼び起こすための大切な使命だと考えています。

この思いを具体化する事業の一つとして、開館翌年の2014年から「ワークショップファシリテーター養成講座」を実施しています。この講座は、前期・後期に分かれており、それぞれ演劇のワークショップの手法を取り入れながら、講座の最終日の発表に向けて複数回の講座に取り組みます。それぞれ別々に受講しても、連続して受講しても、あるいは後期を受講してから前期を受けることも可能な構造になっています。

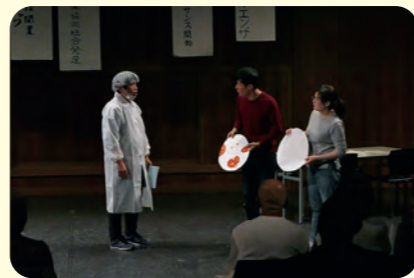
ワークショップファシリテーターとは、「ワークショップの進行役」です。この「進行役」の在り方、人や場との関わり方を学ぶことこそ、この養成講座の意図するところであり、舞台芸術を生活の中で活用するための肝だと考えています。

この冊子では、講座が始まった当初から歩みを共にしてきた講師の皆さんや、実際に参加して下さった受講生の方々の言葉をたどります。その中でワークショップファシリテーターを養成することが市民のまちでの暮らしとどう関係するのか、また公共劇場がそれに取り組む意義とは何なのか、それを紐解く手がかりを探りたいと思います。

もくじ

- 2 事業概要
- 4 PLATからのメッセージ
- 6 座談会「まちや人に無関心でいられなくなる演劇」
- 15 前期
- 18 それぞれの養成講座体験
- 20 受講生のこえ
- 21 後期
- 23 「聞き書き」について
- 26 これまでの開催概要データ
- 27 一問一答 講師陣にあらためて聞いてみた





PLATからのメッセージ

ワークショップファシリテーター養成講座は、豊橋市の小学校・中学校に出向いて行う、演劇を用いたワークショップの進行役（ファシリテーター）を務める人材を育成することを目的に、2014年に開講しました。

前期は夏（概ね毎年全7回）、後期は冬（概ね毎年全10回）に実施しており、これまで172名の受講生を迎えました。講座では現役のファシリテーターとして東京を拠点に全国で活躍する方々と、豊橋在住でありコーディネーターとして全国で活躍する方を講師にお招きしています。

今回、穂の国とよはし芸術劇場 PLAT が取り組むワークショップファシリテーター養成講座のこれまでの冊子にまとめ、その意義や目的、おもしろさや成果を改めて見つめなおすことにしました。

前期・後期の講座を通して、ファシリテーターとしてのものの捉え方・考え方に触れること、また、演劇作りを体験することは、多様化する社会と関わりを持ちながら生きていく我々にとって、大切な気づきを獲得する時間に成り得ることだと感じています。そして、このような考え方・経験を持つ人材が豊橋のまちに生まれ育つ土壌作りの一部を PLAT が担う事は、現代における公共劇



場の役割の一つとして、重要なことだと考えています。

過去の受講生の中には、学校に出向いて行うワークショップの進行役やコーディネーターとして活躍することで、豊橋や PLAT を支えてくださる方のほか、講座での経験を活かして、自身の活動の幅を広げている方も生まれてきています。

この冊子では、講師による座談会や一問一答のほか、過去の受講生の声も紹介しています。受講生の皆さんがどんなことを感じ、楽しみ、行き詰まり、もやもやしたのか…。そんな声も盛り込んでいます。既にファシリテーターとして活動する方や、これから目指そうと思う方、少しでも興味持ってくださいました方…手に取ってくださったあなたに、その声はどんなふうに響くのでしょうか。そしてその響きが、新たな発見や出会いに繋がりますように。

この冊子作りは、これまで講座を支えてくださった講師の柏木陽さん、すずきこーたさん、吉野さつきさん、そして編集の鈴木一郎太さんと共に一年間かけて取り組みました。2020年は、見えない脅威であるウィルスに常に怯え続ける一年間でした。私たちがこれまで経験したことない状況のなかでも、PLAT と共に走り続けてくださったことに、多大なる感謝を申し上げます。この時間が PLAT の在り方を見つめなおす、大切な機会となったことも申し添えます。



まちや人に 無関心ではいられなくなる演劇

ワークショップファシリテーター養成講座 講師



柏木陽 すぎきこーた 吉野さつき

聞き手：鈴木一郎太 イラスト：山本友香



なぜ劇場である PLAT が、 ワークショップの進行役であるファシリテーターの育成をしているのだろう？

近年、美術館や図書館といった文化施設が、建物内の事業実施にとどまらず、外に目を向け、地域との協働をすすめる社会的な事業を実施することが増えてきました。PLAT では施設立ち上げ2年目の2014年からこのワークショップファシリテーター養成講座に取り組んできました。豊橋で演劇ワークショップを担う人を育てることが目的とされており、学校でのワークショップに赴くということもありますが、それ以外にも意図されていることがありそうです。この座談会では、講座内容と、その背景にもなっている講師陣の考えにふれながら、この講座の意義や意図の理解を深め、豊橋のまちで展開することによって開かれる可能性について考えてみます。

——— どうぞ、よろしくお願いします。さっそくですが、PLAT でみなさんが実施してきたワークショップファシリテーター養成講座の内容を教えてくださいませんか？

柏 木 前期と後期があって、前期は子どもたちと何らかの活動ができるようにしてみようということがゴールになっています。「ワークショップ緑日」というタイトルのイベントが最後になって、実際に子どもたち相手にワークショップをやります。後期は、まち歩きをしながら気になるスポットや人など、見つけ出したことを調べたり、人には「聞き書き」っていう手法で聞き取りをして、最終的に演劇にして発表するっていうことをやっています。

——— この講座を仕掛ける上で、狙いみたいなことがあったら教えてくださいませんか？

こーた ゆくゆくは皆さんで演劇を作るワークショップを構築してほしいという思いがあって、そのために、まず前期はワークショップ進行を試してみよう、となっています。その後、演劇作りにつなげていきたいのですが、ワークショップの経験がないのと同時に、演劇を作った経験というのもない方が多いので、じゃあ後期では実際に演劇を作るっていう工程も一通りやろうっていうことで…

柏 木 こーたさん、こーたさん。多分そういう言い方だと、脚本があって、演出家がいる、を想像するんですよ。後期に関して、でも僕ら、違うことするじゃないですか。そこを説明しないとイケないですよ。

こーた そうね。例えば、あんまり演劇の経験がない人が演劇をやろうとすると、例えば会話をしていると、その会話を見せることを演劇って思いがちなんですけど、僕らはただ紙を持ってそれを読んでいるのを誰かが見てるってだけでもすごく演劇的な行為だと思っているし、むしろ演劇だと思っているわけです。だから、演出家がいるとかいないとかじゃなくて、自分たちが感じたり発見したことを他の人に伝えるっていうことが演劇なんだってことが僕らの中に前提としてあります。感じたり発見することって自分たちでやるから、自分で探しに行くしかない。見つけよう、調べよう、話を聞きに行こう、っていうことで後期はまちに出ているんです。

柏 木 僕らがとってる手法は、脚本があって、役柄決めて、セリフ覚えてみたいなことではなくて、参加者が自分たちの興味が引かれることを調べて、それを元に、自分たちが調べようと思った動機や面白さを、舞台上で伝えるためにはどういう構成にしたらいいだろうかと考えながら作ります。ディバイジングって呼ばれている手法で作るわけですね。それが、一般的に「演劇」って言ったときに抱くイメージとはだいぶ違う形で、体験しないとわからないので、後期の構成はその体験としています。



——— その手法は、ワークショップの現場で役に立つから採用してるっていうこともあるんですか？

柏 木 もちろんです。例えばちっちゃい子どもたちと一緒に演劇を作ろうと思った時に、彼らはセリフを覚える方法だともものすごくたどたどしくなってしまうんですよ。でも「ねえねえ、あそこでさ、夕

コにつかまっちゃってるお姫様がいらっしゃるんだけど、どうする？」みたいに聞くと、「助ける」とか、「え、俺やだ」とか言い始める。そうすると流れがうまれて、「じゃあ助けるぞ」、「よし」、「え、俺はやだよ」という具合にやれるわけです。そういうふうには、脚本なくても演劇なんか全然作れちゃうでしょう。ということはやっぱりしてもらわないと、実際の現場で苦労するので。

こーた よくドラマがあるとか、クライマックスがあるっていう派手な物語性をすごく求めていたりするんですけど、でも僕自身は、普通の人が普通のように語ってもその中にはものすごく物語があるし、それがすごくおもしろくて、何かそういうことができるといいなと思っています。

例えばパン屋さんの演劇を作ろうとして、誰かが脚本書いて、じゃあこのセリフ覚えてねと投げかけられて、「え、パン屋さんってどう言うんだろう」って考え始めて、役作りとしてパン屋さんのことをものすごく考えたり調べたりしていくわけです。ここの講座でやってるのは反対で、まずパン屋さんに話を聞いて、その人となりやどういうふうにならなっていくのかという、さきほどの役作りとは逆みたいなことをやって。そういうことのほうがおもしろいし、深みがあるんじゃないのかな、と僕は思っています。それを自分がどういうふうにしたのか。自分が思ったことがストレートに出てくるのが、僕はおもしろいと思って、それをやりたいなっていう感じです。

—— なるほど。必ずしも演劇経験がある人たちばかりとやるわけではないから、自分の体験を基にして作るとうそっぽさが減るってことなんでしょうか？

こーた それもあるんですけど、例えば誰かに聞き書きしにいった、親を継いでパン屋になった経緯の話を聞いたとします。聞いた側が、その話の中からどのエピソードをおもしろいと思ひ、チョイスしたかっていうところに、チョイスした人そのものが結構表れていると思うんですね。チョイスした人の表現というか。だから直接的に自分が体験したことでもなく、やっぱりそういう人間味っていうか、選択をする中に本人が現れるみたいなのっていうのがおもしろいと思っています。だから、すべてが全部自分の経験を劇にするっていうことでもないですね。もっと言うと、なぜその人のところに行っただけかっていうところから、既にもう始まっているってことですよね。

—— どこ取材に行くか、聞いた話の中からどのエピソードを膨らめていくかという選択にも、その人の表現が入っているという視点おもしろいですね。それと、自分で感じたり、発見したことを伝えるということが根幹にあるから、まちや劇場外のいろいろな場面への広がりが期待できるのかもしれないですね。

ちょっともう1回、仕組みのところに一瞬戻りたいんですけど、毎回講師が3名いらっしゃるじゃないですか。まず、その3人の役割分担みたいなことってあるんですか。



一同 (笑)

柏木 吉野さんはコーディネーターの役割の部分を主には担ってもらっています。例えば、この場がどういうふうにできあがっていくのかみたいなことを話してもらったり、それをどう評価するのかみたいな話題を投げ入れてもらう役割。

吉野 そうですね。PLATとしても学校との間のコーディネーターをやってくれる人を少しずつ育てていくって意図がありますよね。本来は学校だけでなく、いろんな現場をつなげる人って大事で、そういう人が地域内に生まれてほしい、と。

柏木 そして、主たる進行役は、すずきこーた。

こーた そんなことはないですよ (笑)。

吉野 いや、そこは違う。一緒、2人一緒でしょ。

柏木 僕は、茶々入れっていう感じね。

こーた (笑)

吉野 (笑)

—— 異論があるみたいなので、こーたさんに聞いてみます。

柏木 そうね、聞いてみようね。

こーた いや、これはいつも言っていることなんですけど、ファシリテーターっていうか進行役は複数いたほうがいいと僕は思っているんです。1人で進行していると、やっぱりその人が言うひと言にものすごく影響力が生まれてしまいます。そのときに、同じ立場で、違う視点の考えを言える人がいると、受け手が揺れたり、ブレたりする。そこで考えたり、表現したりしますよね。それがいいんです。2つの異なる意見をどういうふうに関しあわせるかというところについて合意形成すればいいのに、ひとつの共通の意見をつくるみたいな合意形成が起ってしまう。しっかりと共同制作するために、進行役自身もいろんな意見があるし、ぶれたりもする、ということを見せていた方がいいと思っています。そうすると、茶々を入れるっていうのはなかなか参加者にはできないことですよね。だから、もう1人の進行役が茶々を入れ…、いや、別に茶々入れ係だとは思ってらるわけじゃないですけど。

吉野 (笑)

柏木 結果、茶々入れ係じゃないですか (笑)。



一同 (笑)

吉野 デバイジングって、さっき出た集団創作の方法って、中心を作らない作り方だと思うんですね。そうしないと、それまで別に演劇をそこまで専門にやってなかった人が、地域のいろんな人が関わ

る演劇表現の場を作ろうとした時に、そこにその中心主義的なやり方しかなかったとしたら、結局プロがやったほうがいいじゃんみたいな話になっちゃう。

でも柏木くんとかこーたさんがやってくるのは、中心を作らないやり方を体験しましょう、やってみましょう、っていう講座で、それはもちろんワークショップをファシリテートする時にも生きてくるけれど、自分の職場や仕事の場面でも応用できるものになりうると、私は横から見ながら思ってる。

進行役が1人だとどうしてもそこに中心が生まれて、そこに権力とヒエラルキーと、あと中心主義的な場を作っちゃうと思うんです。でも、今必要なって、影響力のある1人の演出家がすべてを仕切ってものごと動くっていうつくり方よりも、どんな人でも、そこにいる人が関わって、各々なりの責任を持って、みんながその場を動かしてるっていう集団で作ることなんだと思っています。ここのプロデューサーやってる矢作勝義さんが以前何かの時に言っていた“劇場をただ演劇を観る場所でもなく、プロが何かやるだけじゃない場所にしていくことで、戦争が起きないようにしたいんだよね”という言葉にも含まれていると思うんだけど、それは、社会や共同体の在り方として必要なことだろう、大事だろうと思っています。

こーた そうなんです。だから「何でワークショップをやってるんですか？」と聞かれたら、「究極的には世界平和のためかな」ってすごく前から言ってます。

吉野 柏木くんも以前「演劇のワークショップをやることっていうのは、僕は民主主義のためのレッスンみたいなものだと思う」って言ってましたね。

柏木 合意形成をどうしていくかっていうことは、ワークショップをやっていると少なからず直面することではあります。さっき、こーたくんが言ったように、AとBというアイデアがあったときに、AもBも舞台上に上げるためにどう合意するかっていうことを考えればいいのに、「Aにしましょう」、「Bにしましょう」みたいな議論になりがちですね。「AもBも乗せられるよね」とか、「もうAもBもやめてCを出すか」とか、「いやいや、こんなのはどうだろう」とか、みんなで考えていけるほうがいいなって気持ちはあるから、そういう意味では、その中心的な考え方にならずにみたいな話っていうのは、ある程度合意できる部分かなと思いますけどね。



——— これまで6年やってきて、印象的な出来事とか思い出したりすることありますか。

吉野 おっちゃんとおばちゃんがけんかして泣く。

柏木 (笑)

吉野 あれはびっくりしたよね。もう還暦過ぎたかその前後かみたいな年齢のおふたりで。しかも、それまで友達だったとか近所づき合いがあったわけでもない人同士が、取材したある人の話をどう演劇にするかという点で意見が食い違って、めっちゃ真剣になって、最後泣く (笑) こんなことあるの

かと思って。いまだに忘れられないです。

柏木 ひとつ思っているのは、演劇やってる人たちは案外われわれの活動につき合ってくれないんだけど、演劇にはそれほど興味があるわけじゃないのに、くり返し参加することによって確実に講師陣と話が通じる人になってきてる人がいること。そうやってくり返し参加してくれることによる成長があるっていうのと、それが演劇への関心とは別、ということがおもしろかったですね。

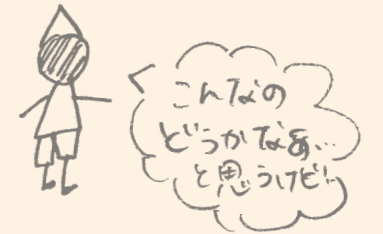
——— 演劇をやってる人たちが、意外と皆さんがやってるこのワークショップにつき合ってくれないっていつのその人たちってどういう人たちなんですか。

柏木 俳優やってる人とか、劇団に入ってますとか、そういう人だよな。

——— 何でつき合ってくれないんですか。

柏木 究極的に言えば、興味ないからじゃない？

吉野 そこに自分たちが求める演劇があると思っていないということ？



こーた 演劇だと思っていないんじゃないのかな？

吉野 自分が表現をしてそれを人に見てもらうことにはモチベーションがあるけど、いろんな人と演劇を通して関わるとか、何か生み出すとか、そういうことには関心がないとも言える。これは別に演劇に限らず、美術とか違う分野でも似たようなことあるって気がする。

柏木 プロジェクト型アートを志向してる人の中で、自分の作品を作りたいだけっていう人はいっぱいいるなっていうのはわかる。

——— 了見の狭さ？

こーた そうですね。だからすごく語弊があるかもしれないですけど、僕らはあっちもありだし、こっちもありだなんて思ってるんですけど、向こうの人は自分らにはありだけど、こっちはないって思ってるんですよ (笑)

柏木 っていうか、そういう対応をされたことが割と多いのよ。

こーた そうそう。

吉野 (笑)

柏木 何だったら、いまだに俺はつき合いのある劇場のスタッフさんの中で言われるから。

吉野 何て？

柏木 「まあ、子どもだましたからな」とか。

吉野 (笑) ひどいっ。

——— すべての人、だれでもが創造力を持っているか、そうじゃないかっていうところの前提が違うのかもしれないですね。

柏木 まあ、そうね。



吉野 そうね。

こーた 例えば個性みたいな話をしたときに、ものすごい特別っていうか、何か飛び抜けたものを想像しちゃうんだけど、そうじゃなくて、それぞれみんな、その人なりの何かがあって、その違いだったり、思うことだったり、その何かを舞台に乗っけたり、他の人に見てもらってということが、とても豊かで面白くて深みのあるものだなって思う。

吉野 大学で学生たちと付き合っていて、「個性」や「特別」ということへの呪縛たるやすごいなと思う。コンプレックスや、自己肯定感の低さや、自信のなさによく出くわす。どこかで芸術とか演劇やる人は何か突出したものを持っている特別な人だと思込みも強くて。だから今こーたさんが言ってたような、「みんな、その人なりの何かがあって」という視点に出会うことで、いつの間にかとらわれていた呪縛を外すきっかけになる人もいるだろうって思う。話それちゃった、ごめん。でも、そういうふうに自分のやっけることにいろんな可能性があるって意識できるかどうかで大きく変わると思う。これは学生に限ったことでなく、専門家と呼ばれる人たちでも同じ。

柏木 そうそう。本筋みたいなふうに考える人たちはいるとは思う。本筋は作品創造であって、ワークショップとか市民参加みたいなことっていうのはある種、公共であるということ担保するための言い訳だって考えてる人は、案外まだいる。

こーた うん。だから、ほっとくと演劇が特別な人だけのものになってしまう。演劇っていうのはみんなのものっていうか、誰がやってもいいって僕は思ってるわけです。もちろん、ある特殊な人たちが、もうそれはすばらしい作品を作っているわけですけど、でも何かそれだけじゃなくて、演劇ってもっと懐の広いもんだらう、深いもんだらうっていう気がしているんです。だから、そういうことをもっと多くの人に知ってもらいたいし、そういうスタンスでいる人が増えてほしいなっていうところはありますよね。

—— 見るか、やるかで言ったら、やるほうが演劇は楽しいって思いますか？

こーた 僕とか柏木さんが若い頃にすごくお世話になった東京の劇場の制作の方が言ってた「演劇ゴルフ説」っていうのがありましたね。

柏木 「演劇ゴルフ説」の肝は、ゴルフの中継がよくテレビで放送されてるわけだけど、あの中継を見ているのは基本的にゴルフをやってる人たちだよなってことです。そして演劇の場合も、演劇を見に行ってるのは演劇やってる人たちでしょって。だったら演劇をやる人を増やせば、演劇の観劇人口は増えるでしょっていう話。

—— 参考書的に中継を見ているっていう？

柏木 そうそう。圧倒的にそうですね。「演劇将棋説」と言い換えてもいいんだよね。

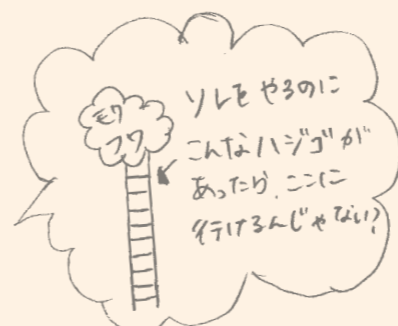
こーた そうそう（笑）

吉野 やっぱどっか作り方に関心があるっていうことなのかな、それは。

こーた さっきの話にちょっと戻るんですけど、「養成講座やってきて印象にあること」っていう。別に特別なことじゃないんですけど、やっぱり後期の最後の発表会に、まちで取材した人が見に来るっていうことはすごく大きいなと思ってます。その人こそ、本当に普段は演劇とか見てなくて、たまた

ま受講生に取材されたことがきっかけで、「俺が劇になっちゃうの？じゃあちょっと見に行こうか」みたいなノリで見に来てくれるわけです。

で、「ああ、何か面白いな」って思ってくれたりとかもあるんですけど、他の人がその人を知るようになったりとか、何かどんどん広がって行って、演劇をつくった人も、見に来てくれた人もまちを見る目がちょっと変わってくるような感じがして、こういう芝居の作り方をしている面白くなって思うし、印象深いところですね。



—— まちに関わるこの話が出てきましたが、取材して演劇のネタを集めること以外に、まちに関わるこの狙いはあるのでしょうか？

柏木 受講生や、お話を聞いたまちの人の豊橋のまちの見方が変わったりとか、まちを好きになったり、そこに生きている人たちを浮き上がらせていくことが僕はすごくおもしろいと思ってるので、何かそういうことがやればいいというのがひとつありますかね。架空の物語より、何かその人がそこに生きてるっていうことだけで、ものすごいおもしろいし、尊いものだと思うんです。何かそういうことにふれていくと、ちょっとまちの見方や在り方が変わって、そこに自分が生きてるっていうことに無関心でなくなっていくかなって。それが公共劇場がまちにある意味かなって思います。

吉野 私はどっちかっていうと、まちとかそういう要素にそんな関心がある人じゃなかった。

柏木 そうなんだ（笑）

吉野 はい（笑）
大学の仕事でここに来た時がちょうどまちにも劇場にもそんなに関心がなくなってきていた時期だったんですよ。でも「まちに聞く」を初めにやった年に、親しみも知識もない土地に対して、まちの断片のちっちゃい物語が合わさって何となくぼやっとこのまちが立ち上がって見えたのは、けっこうおもしろい体験だったのはあったかな。

柏木 わざわざ知ろうとしないしね、別に。知らなくたって生きていけるし。

吉野 そう、知らなくたって生きていけるんだよね。同じ地域に住んでるけど、別に知らなくても生きていける人たちの存在ってたくさんあって、その人たちがどういう状況にあって何か大変かもしれないとかいうことにも目が向かない。でも、実はいろんな人がいることに目を向ける、演劇を作りながらその人たちのことを想像をすることが、まちに関わるこの理由になるかもしれない。

—— 最後になりますが、ワークショップファシリテーターってどんなことが大事ですか？ または、どんな人がここから育つとうれしいですか？

こーた 簡単に言っちゃえば、養成講座でやっているような劇を作れる人になってほしいですね。その中には合意形成の取り方だったり、ほかの人のことどう受け止めてどう返していくかみたいなことだっ

前期

まずはシンプルにワークショップをつくって、やってみる

たり、何かそういうものがいろいろ複雑に絡み合っているわけですけど、端的に言うと多分、劇を作れるようになってほしいって思ってるかなあ、僕は。



吉野 難しいな。でも、どんな人、どんな人ね。養成講座終了後も、継続的に一緒にいろいろやるようになった人たちがいるのがよかったなって。だからそういう人たちが増えたらいいなって思ってる（笑）ちょっとこーたさんと私は視点が違うかもしれないけど、中心を作らないやり方で演劇つくれるような人が育つといいなっていうのはあるけれども、私は自分がコーディネーターをしているので、その場を作るためのコーディネートと一緒にやるような人が出てくるといいなあって思ってます。

こーた 僕は演劇をやってるから演劇をやれる人がいいって思ってるけど、恐らくいろんなところに応用が利くっていうこともあって、音楽やってる人だったら音楽をやれるような人が出ればいいなって思っかもしれないし、料理する人だったら何かこういうやり方でみんなで料理を作るみたいなことができればいいなって言うかもしれないし、みたいなことであって、吉野さんが今言ったこととそう差はないかな。

—— 地方都市での仕事と考えると、直球で演劇を使いましょうみたいな機会ってというのがすごくあるわけじゃないわけで、逆にそうした場を作れる人、その機会を作れる人も同じく必要だっていうことなんですか？

吉野 うんそうです。しかも例えばそのコーディネーターって仕事が専門ですっていうのもまた直球で、それぞれ自分の仕事とか何か演劇以外にやることがありながら、その領域とつなぐとか、そういう視点をいろいろ持てる人が増えてくるといいのかなって思ったりしてます。

こーた だから、難しいですけど、例えばこの楽器はこうやって弾くんだよとかそういうことは多分技術的に教えられるんだけど、音楽をどう楽しむかっていうことは教えられないじゃない、ということに似てるかな。あるものを使って楽しんだり、ものを創造していくってのはやっぱり人それぞれに出てくるものが違って、それがおもしろいわけで、そういうおもしろさを使えるような人になっていくとくれるといいなと思って、講師として教えたり、伝えたりしてる。

柏木 僕とかこーたくんみたいな生活の成り立ち方は、地方都市の中ではなかなかできないだろうと思うんです。演劇ワークショップを専従でやって生活が何とかなるような状況にないと思うから。だから受講した人たちが日頃の生活の中で真価を発揮する。それが成績が上がるとか、職場が楽しくなるみたいな結果と結びつくことで、演劇を勉強するっていうことはこんなことにもなるんだっていうことを、くりかえし、くりかえし証明していくことでしか、社会の見え方は変わらないでしょう。で、だとすると、社会の中で「芸術つつうものはすげえ！」みたいなことに気づきやすい状態をつくったり、ここで演劇やると案外面白くなるかもしれないっていうのを、うまく翻訳して伝えられる人は、仕事にしていける可能性があるんじゃないかって思います。ファシリテーターの仕事って、半分ぐらい日本語から日本語への翻訳をしているから、そうした翻訳が求められる場面はわりといろんなところにありそうですね。

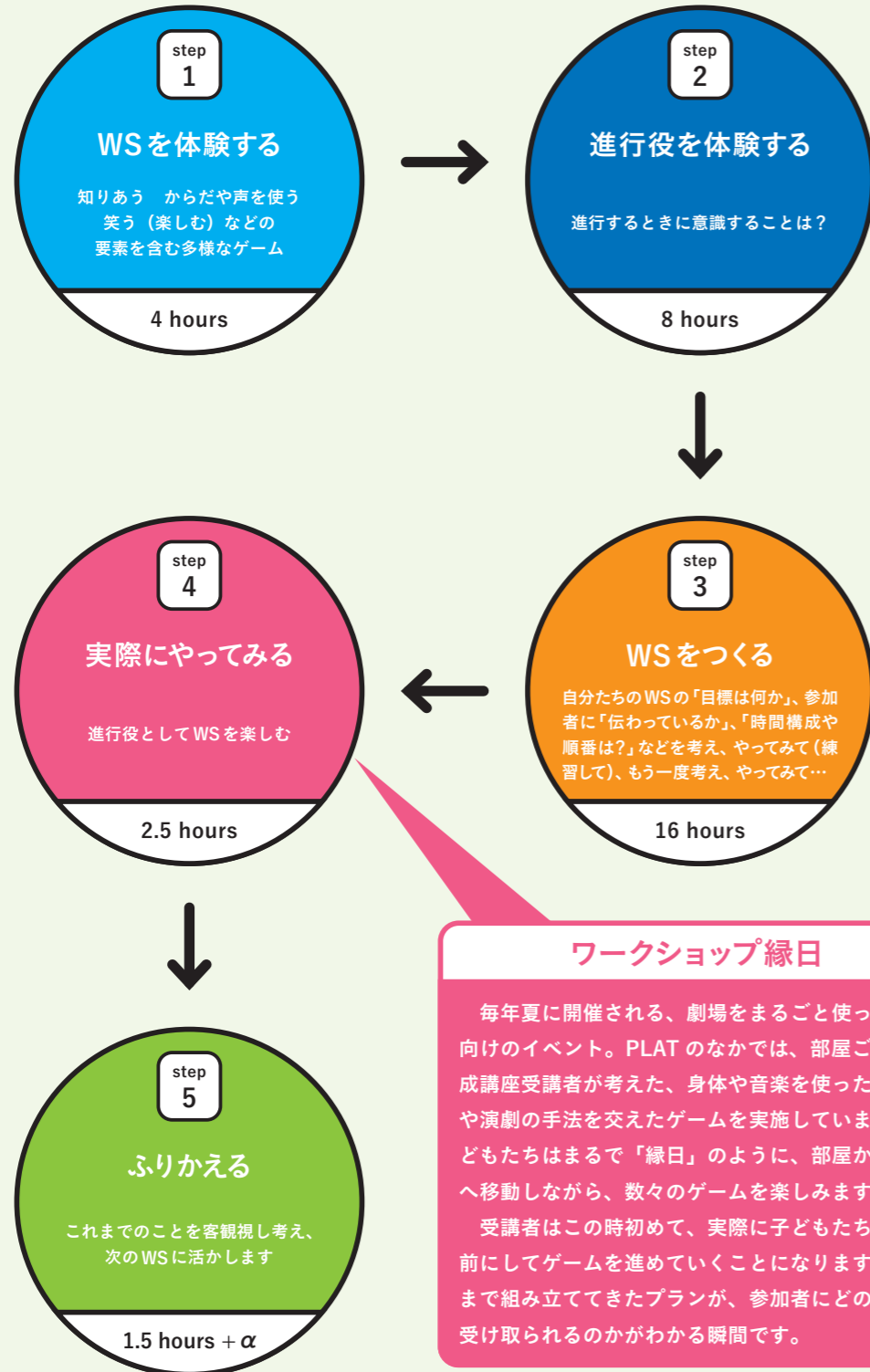


前期

概ね毎年全7回／例年7月下旬～8月末

演劇の手法を用いたワークショップ（WS）を知り、自分たちでも考え実践する。チームやグループなど組み合わせを変えながら、身体や言葉を使った様々な演劇的ワーク、そして進行役を体験する。

前期の終わりには、夏休み中の子どもたちが参加するイベントに合流し、そこで自分たちオリジナルのワークショップを実際にファシリテートするよう設計されている。そのため、後半はワークショップ創作とその試行錯誤にグループで取り組む時間がたっぷりある。また最後は必ずふりかえる時間となっている。



ワークショップ縁日

毎年夏に開催される、劇場をまるごと使った親子向けのイベント。PLATのなかでは、部屋ごとに養成講座受講者が考えた、身体や音楽を使ったゲームや演劇の手法を交えたゲームを実施しています。子どもたちはまるで「縁日」のように、部屋から部屋へ移動しながら、数々のゲームを楽しみます。

受講者はこの時初めて、実際に子どもたちを目の前にしてゲームを進めていくことになります。これまで組み立ててきたプランが、参加者にどのように受け取られるのかわかる瞬間です。

※所要時間は2019年度の時間配分をもとにしております



これまでワークショップ縁日で実施されたワークショップ一覧



2014年
音楽ウィルス
パラパラリレー
ねんどであそぼう
目かくしてあてっこ
ビー玉ぼんぼん
仮面を作ろう



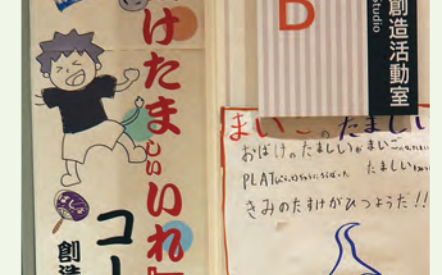
2015年
スリッパとぼそ!
色とかけであそぼう!
くきであそぼう!うちわでとぼそ!
いろどり・ふちどり・じぶんスタンプ
手作り楽器をならそう!
スーパーものがたりスコロク



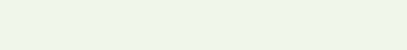
2016年
紙ヒコーキをとぼそう!
プラット数学研究所
ようこそ!Oの国へ
ジャングルであそぼう!!



2017年
ついた、きえた
ライオンのすみか
巨大スコロク
からだで絵本を描こう
なりきりミュージアム
キってツナげてヘンシンだ
きょうだいかもしれない
なつみとなんにもなれる
えんげきとあそぼう



2018年
たんけんかくんれん学校
おぼけたましいれ
まっくらやみであそぼう
もりのなかであそぼう
えんげきとあそぼう



2019年
紙ひこうきをつくってあそぼう!
にんげんあやとり
星空であそぼう
紙フェス
えんげきとあそぼう



それぞれの養成講座体験

ひとくちにワークショップと言っても、参加前に持っているイメージや、講座を受けている中で感じることで、終わった後に思うことは、同じ時間を共有していた人同士でも個々によって大きくちがいががあります。

ここでは、参加者3名4パターンの心の動きを追跡してみます。

※「えんげきとあそぼう」ワークショップファシリテーター養成講座の受講経験者が、子どもたちに向けた演劇作りのファシリテーションを実践する2日間のプログラムの。鬼ごっこやかくれんぼといったありふれた「あそび」にちょっと工夫を加えることで、創造力豊かな演劇づくりにつなげます。1日目は演劇を使った遊びと、演劇の物語作り。2日目はつくった物語をもとに創作し、発表します。

	Aさん			Bさん	Cさん
	初参加 / 2014年	参加3回目 / 2016年		初参加 / 2014年	初参加 / 2016年
体験前	<ul style="list-style-type: none"> → 普段自分の住んでいる地域でワークショップを実施しており、ファシリテーターという単語も知っていた。 → この講座に参加することで、ファシリテーターとしての技術を学べるのかな？ 	<ul style="list-style-type: none"> → 1年目は楽しすぎて、2年目は全日程参加できなくて不完全燃焼。3年目はこれまでの経験を活かして「えんげきとあそぼう」*をやるうと考えていた。 		<ul style="list-style-type: none"> → 地域の子も達との活動に参加することになり困っていた。ヒントが欲しかった。 → 医療現場を離れた活動をするために勉強をしていた時、出会った人に紹介してもらった。 → 医療職として仕事する中で、コミュニケーションについて知りたかった。 	<ul style="list-style-type: none"> → 大学でアートマネジメントを学んでいる中、ワークショップとは教育上よいことが起きると習っていた。どんなすごいことが実際の現場で起きているのか知りたかった。
step 1 WSを体験する 知りあう からだや声を使う 笑う(楽しむ) などの要素を含む多様なゲーム	<ul style="list-style-type: none"> → これまで防災など生活に寄りそうワークショップばかりやっていた。クリエイティブな内容にびっくり！楽しい！ 	<ul style="list-style-type: none"> → 「えんげきとあそぼう」に手を上げようと思ったが、メンバーがのやる気がすごかったので遠慮した。 → 3年目となると、皆に会いに行くのが楽しくなった。ワークショップについて深く話せるのはこの場だけ。 		<ul style="list-style-type: none"> → 何か正解があるのではないかと探っていたが、正解が分からないワークばかり！正解はないというのが徐々に分かってきた。 → 講師によってやり方が違っていた。演劇に触れたことが無かったので、テンポが早いワークショップが苦手だった。 → ワorkshop中に分からなくなって、テンパっていた時に「この人限界で一す！」と柏木さんが代弁してくれた。救われた。 	<ul style="list-style-type: none"> → 参加している自分が尊重されていると感じた。 → ワorkshopで使ったダンボールなど、備品が揃っていて、PLATは劇場なんだなあと思った。 → 連続で参加していた人たちの視点が勉強になる！と思った。
step 2 進行役を体験する 進行するときに意識することは？	<ul style="list-style-type: none"> → 自分は進行せず、講師がどんなアドバイスののか、様子を見てみよう。 	<ul style="list-style-type: none"> → 最初はアイデアが出てこなかったが、話し合っていくうちに色々なやり方が思い浮かんできた！ → 発案者が1回目進行した後、「自分のやり方もやらしてくれ！」と自分の考えたアレンジを試させてもらった。ちょっと達成感。 		<ul style="list-style-type: none"> → もともと人前で話すのは苦手な中で真っ白になっちゃう。 → 簡単な遊びのルールを伝える時、すべて言葉で伝えようとして時間がかかってしまった。 → 講師は簡単な言葉でとても分かりやすかったけど、自分ではできなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> → 知っているゲームを説明するだけなのに、言語化が出来なくて苦労した。進行って難しい！という嫌な記憶に…。
step 3 WSをつくる 自分たちのWSの「目標は何か」、参加者に「伝わっているか」、「時間構成や順番は？」などを考え、やってみて(練習して)、もう一度考え、やってみて…	<ul style="list-style-type: none"> → 2つの案があるグループ。どうやって共同作業をしていくのが悩む。 	<ul style="list-style-type: none"> → 合意形成するのに困らないメンバーだった。なにやる？何やる？となっていて、いいね！が積み重なっていった。 		<ul style="list-style-type: none"> → 芸術に詳しくないから照明の仕事をしている人がいるグループに行ってみよう。 → 自分たちで考えたワークショップを試したら楽しかった！でも、子どもたちは楽しいのかな…。 → 準備のために図書館に行ったり、講座外でも活動した。とても楽しかった！けど、不安もいっぱい。 → 正解がわからない中、自分の役割を見つけた。 	<ul style="list-style-type: none"> → グループ内の意見を取り入れられない人がいる！悔しい！STEP1で感じた安心感が無くなってしまった。 → 講師は受講生の意見をくみ取ってくれる。なぜグループではできない？もっとうまい話し合いの方法があったのではないかな。 → 気付いたら、いつの間にかワークショップ内での役割が決まっている…もやもや。 → フィードバックをもらうたびに疑心暗鬼に。不安が募っていった。
step 4 実際にやってみる 進行役としてWSを楽しむ	<ul style="list-style-type: none"> → 難しかった！ → 楽しんでほしいなと思って、どうやら笑ってもらえるのか、めっちゃ考えてた。 → 子ども達に「味わってほしい」のか「楽しんでほしい」のか話し合っなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> → もめることもなく、ジャングルを作り、すげー楽しかった。当日、子ども達も楽しんでくれて、すげーおもしろかった。 		<ul style="list-style-type: none"> → 苦手意識の強い役割もあったけど、写真を撮ると自分もできそうな役割を担当することで、楽しむことができた。その場で思いついて小道具を作ったり、こうしたら楽しくなるかも！と思い切った行動ができた。 → ワorkshopを企画することは難しかった。自分が出来るようなこと、楽しめそうなことを伝え、役割を見つける事ができた。メンバーに役割をお願いすることもできた。 	<ul style="list-style-type: none"> → 子ども達を前にして、リアクションを受けて、楽しいということが分かった。面白いと思ってきているんだ！
step 5 ふりかえる これまでのことを客観視し考え、次のWSに活かします	<ul style="list-style-type: none"> → 何をやっていたのか、当時は分からなかった。 → お互いが大事にしていることが明確にならないとモヤモヤが残る。 → 言語化って難しい。 → 技術的なことを学べるものだと思っていたが、みんなで協働したり、合意形成する場だった。 	<ul style="list-style-type: none"> → 楽しかったが、上手くいきすぎて、あれ、大丈夫かな？となった。 → 遠慮せずに「えんげきとあそぼう」チームに行けば良かったという後悔も…。 → 年数重ねると人が変わるのがおもしろい。新しい概念が入ってきて、自分のアップデートに繋がる。 		<ul style="list-style-type: none"> → 結局ワークショップって何!? 全く分からない！ → 講座なのに技術的な事は何も触れず、自分たちの意見交換で終わり、何の落ちもない！悶々とした。 	<ul style="list-style-type: none"> → くやしさが9割。グループで作ることって難しい。 → 続けてみたらうまくいく方法が見つかるのではないかなと思い、後期を続けて受けてみようと思った。悔しいままでは終われない！
体験後	<ul style="list-style-type: none"> → 豊橋の小学校へのアウトリーチに同行した。 → 後期も受講 	<ul style="list-style-type: none"> → 講師のこーたさんと柏木さんに地元に来てもらいワークショップをもらっている。 → 後期も受講 		<ul style="list-style-type: none"> → あまりにもワークショップの事が分からなくて、理解を深めるためにワークショップの事を外から見たたくて記録係に志願する。のちにPLATの委託コーディネーターに。 → 後期も2回ほど受講 	<ul style="list-style-type: none"> → 大学の授業の理解が深まった。 → 後期も受講。そして数年後、PLATの職員に。

後期

とよはしのまちで 演劇をつくる



受講生のこえ

SKさん（女性／会社員）

初めてファシリテーターの養成講座に参加したときに強く感じたのは、受け入れてもらえる場所があるということ。何をやっても、講座内でやったことに対して否定的なことを言われなかった。それがすごくうれしいというか、安心できるというか、自分を認めてもらえるというか。それを強く感じたのを未だに覚えている。それを思い出すと泣きそうに…。それがずーっとずっと心の中に残っていて、すごくいい時間を過ごせた。

演劇をやって、演出家がいる、演者がいて、演出家が言ったことに対してどう答えていくかというのを意識してしまう。やったことを認めてもらうために、どうしたらいいのかを考えて動いていた。だけど講座では、何をやってもいい。バカバカしいかなと思うことも、自分がやりたいから、自分が楽しいと思うからやる。それを受け入れてくれるのが、自分の中で衝撃的で、心に残った。これは続けたいと思った。

芝居ってどこにでもあるのだなと思って。舞台と客席の関係ではなくて、地続きになっているというか、やろうと思えば誰でもできるというか、それを強く感じた。自分の演劇に対する考え方が変わった。

HNさん（男性／ヨガインストラクター）

講座に参加するまでは演劇と全く縁の無い生活を送っていた。演劇は舞台と観客が分かれていて、自分と観客の間に明確な境界線があるというイメージがあった。はじめて前期講座に参加したときに、舞台も客席も無い空間で何かが始まったので、自分の中の境界線がなくなったというか薄れるという変化があった。

人間と人間が関わることで相互に関係し合うことだと思っているので、観客と舞台が分かれているということはどちらかという一方的に見せられる、そして見るだけ。それよりもお互いに見合ったり、お互いにやったりの方がしっくり来る。

YHさん（女性／自営業）

養成講座に何年も参加しているから、ゲーム教えてと言われるけど、養成講座に通っていて学んだのはゲームではなくて、どっちかというファシリテーターとしてのありかた。その場にどうやって立っているのかとか、そこに立つためにはどんなマインドでいるべきなのか、ワークショップ中にごく困っちゃった人がいたら、どうやったらその人たちがその場にいてもいいって思わせてあげられるのか。そういうことをやる人がファシリテーターなんだと学んだ。

ファシリテーターって自分をさげ出さないと出来ない仕事。そうすることで、参加者がその場においていいと思えるし、さげ出せないこっちに来てはくれない。そうするためには自分自身がちゃんとしていないとだめだなと思って。ファシリテーションの勉強をするって人間の勉強をするとか、人生の勉強をするとか、自分のあり方について勉強をするということだから、人前に立つとはそういう事なんだなってわかった。

YYさん（女性／自営業）

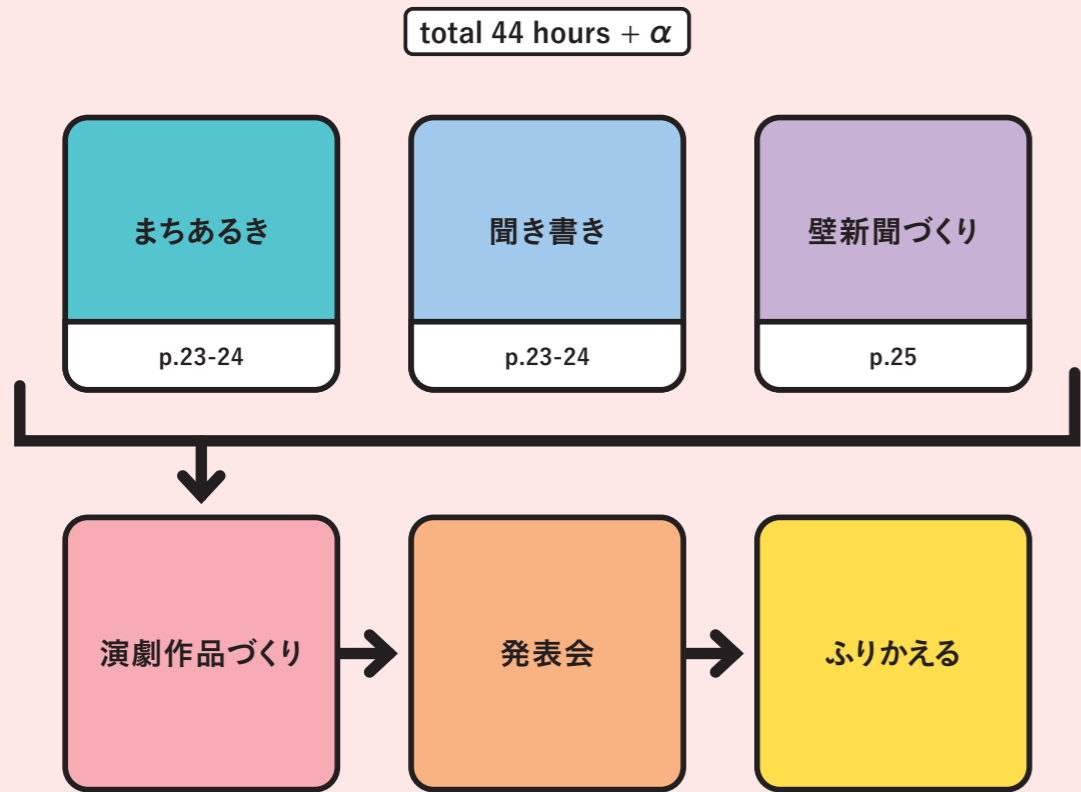
芸術に縁のない私が、いち豊橋市民として劇場を通して信頼できる人に出会えたのは奇跡だなって思った。ワークショップのことで困ったときに助けて一っ言えたり、切磋琢磨できる人達に出会うことができ嬉しかった。講座のご縁を活かして自分でワークショップを企画したときに手伝ってくれたり、参加してくれた。

仕事や趣味の出会いはあると思うが、講座を通して違う畑の人たちと出会えたし、学びの場として助かっている。

後期 「まちに聞く、考える」

まちの人に取材した内容を元に、演劇作品をつくり上演する養成講座のメインプログラム。
直接ワークショップファシリテーションを題材にした設計の前期と比較すると、わかりにくさを感じる方もいるかもしれない。しかし、劇場の外へ出かけ、人との関わりの濃さも強まる後期には、むしろワークショップファシリテーションの実践につながる要素がたくさん含まれている。

まちの人から話を聞き出し、気になるところを見つけ、深掘る。そして、他の参加者の書いた聞き書きとすり合わせ、情報を整理し、一目で伝えるためのコピーをつくり、文章を書き、内容の理解をふくらめるための追加取材や調査を行い、みんなで壁新聞に仕立てる。最後は、メンバーの発想を活かして、人に見せる演劇作品とするために創造性を存分に発揮する。



「聞き書き」について

すずきこ一た

「聞き書き」は、多くの方がやられているので、それぞれでやり方が少し違うこともあります。 「インタビューをして、お話し下さった方が一人で話し続けているように書かれた文章」で、この点は共通していると考えます。本講座の場合は、録音せずにメモを取り、メモを頼りに書いています。話して下さる内容はもちろんですが、一人称（私、僕、など）、語尾（～です、～だよ、など）、口癖など、内容以外の部分も大切にしています。人柄が表れることがあるからです。また、聞き書きとは直接は関係ないですが、この講座では「聞き書き」の後に演劇をつくるため、身体的なこと（ポケットに手を入れて話す、考える時は少し上を向く、など）もメモするようにしています。

取材ではたくさんのお話を聞きますが、「話し手が一番伝えなかったこと」と「取材者が強く惹かれたこと」を意識して書きます。本講座の聞き書きは、例えば仕事内容を知ることが重要ですが、お話し下さった方の「ひととなり」を表現することをより大切に書き起こします。「仕事」についての取材中に戦争や震災の話になったとしても、「関係ない」と切り捨てるのではなく、出てきた話は、話して下さった方を構成している大切な要素なので、しっかりと受け止める必要があります。

一方で、同じ話を聞いても、聞き手（取材した人）によって詳細に書かれている部分が違ったり、そもそも書き起こされていない部分があることもあります。それは聞き手それぞれの興味がひかれるポイントの違いによるものですが、「聞き書き」は、話し手を通して書き手のことも表される文章です。

「他者のことを受け止める」のは、ワークショップをおこなう上で非常に大切です。「聞き書き」のために「話を聞く」のは、そのはじめのいっぽですが、書かれた「聞き書き」を読み比べることによって、ワークショップ参加者の違いを浮き上がらせ、それを受け止め、どこに目標を定めるか考えることに繋がります。

ワークショップは共同（協働）作業をする場です。自分の意見を主張するのが上手い人や苦手な人がいますが、そこに上下関係をつくってはいけません。目標（この場合、一義的には演劇をつくること）に向かう時に意見を出すことを躊躇させるような関係をなるべくなくす必要があります。「聞き書き」は、同じ話を聞いても違う文面で表れるため、短い言葉ではありませんが、平等に考えを伝える機会になり、また他の人の考えと客観的に比べることができます。そこから「目標をどこにするか」を考えます。「聞き書き」はワークショップの場を構築するのに適した方法の一つだと言えます。

まちあるきと「聞き書き」から、どんな演劇ができあがった？

羽田八幡宮文庫

答えてくれた人：岩瀬彰利さん
2019年度
制作者：小田たつ子、小林留奈、中山直也、本田信英、峰岸優香

1回目のまち歩きで、地元で有名な羽田八幡宮を訪れた。ここでは江戸時代から文庫の貸出しを行っていた「羽田八幡宮文庫」があったのだそうだ。詳しく宮司さんに話を聞いていると、書籍の数々は今では豊橋市中央図書館に場所を変え、保存されているらしい。宮司さんが、羽田八幡宮文庫の歴史に更に詳しいという中央図書館の専門員・岩瀬さんを紹介して下さいました。岩瀬さんへの取材では、文庫の歴史など様々な話を伺い、我々はそれを基に「聞き書き」を書き起こした。

演劇づくりでは、まず当時の様子が描かれた「羽田文庫紅葉の図」（鈴木拳山筆）を身体で表現していくところから取り掛かった。桜、人、建物をそれぞれで表現し、絵に描かれている、当時の文庫貸出しシステムを再現した。

聞き書きの時



それが作品になった場面



コンドーパン

答えてくれた人：近藤はやせさん
2017年度
制作者：加賀茅捺、柴田公代、本田信英、古井勇亮

最初のまち歩きを終えて、受講生全体で取材先を考えていた。そのときに誰かが「昔からやっている、豊橋では有名はパン屋さんがある」といって、まち歩きで訪れていたわけではなかったコンドーパンが、取材候補にあがった。

アポイントを取って取材にしてみると、店主は不在のため奥さんの近藤はやせさんがお店のこれまでの歩みや、幼少期の思い出などを語ってくれた。演劇にするにあたって、聞き書きを読むだけの動きをつけないシーンづくり、セリフを付けずに動きだけのシーンづくりなど、いろいろな演劇の立ち上げ方を試しながら進めていった。はやせさんのあたたかくチャーミングな人柄を伝えられるよう、なるべくご本人の口癖や仕草を取り入れていった。

聞き書きの時



それが作品になった場面



日比野食堂

答えてくれた人：日比野洋子さん
2019年度
制作者：斉藤紀世子、柴田公代、塚本裕孝、宮崎舞

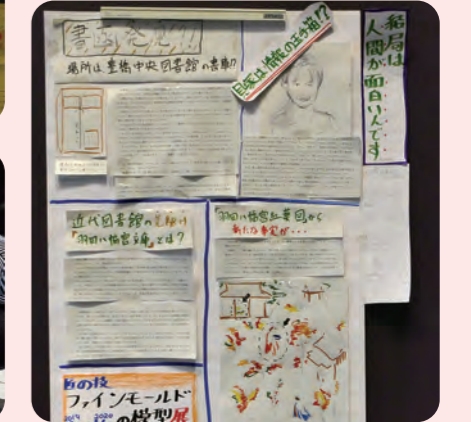
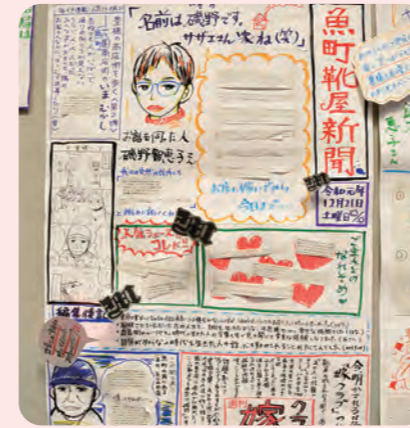
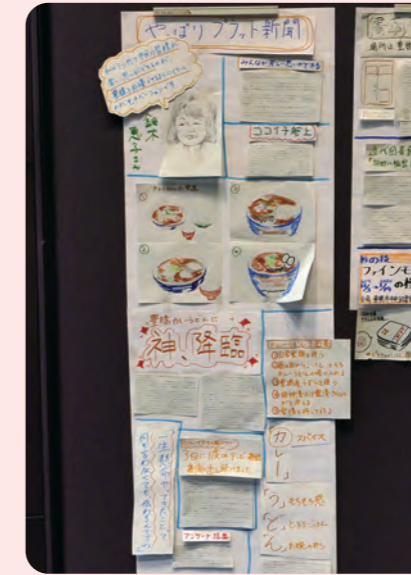
チームに分かれた後、「聞きたい人」や「行きたい場所」を考えた。年齢を重ねた人の話を聞きたいと方針が決まり、叔母さんが食堂をやっているというチーム内のメンバーにアポイントを取ってもらった。日比野洋子さんが経営する「日比野食堂」に取材を行い、選層を越えてから通信制の学校に通った話など、日比野さんにしか話せない話をたくさん伺った。

前回の東京オリンピックのことも伺った。人が多くて、聖火がちょっと見えたくらいだったけれど、そのことを今でも覚えているのだそうだ。「聞き書き新聞」を作る際に、その様子をイラストにして書き加えた。シーンづくりに取り掛かって、そのイラストを受講生のみんなで再現しながら動いてみたり、台詞を加えながら演劇を創っていった。

聞き書きの時



それが作品になった場面



「壁新聞」から演劇をつくる

後期講座では、取材し、聞き書きし、「壁新聞」をつくり、そこから演劇をつくります。

一次資料として書き起こされた聞き書きには、話して下さいました方が詳細に表れていますが、情報量も膨大です。そのまま演劇づくりに入ると、取材者（＝演劇をつくる人）は相手のことを思い、全部を演劇に盛り込みたくなります。そこで、「壁新聞」づくりを通すことで、膨大な一次資料の情報が整理され、伝えたいこと、とりあげることが少しははっきりします。

新聞は、大見出し、小見出しなどで、記事の内容のポイントを短い言葉で表します。トップ記事を何にするか考え、「社説」などで主張もします。文字では伝わらないことを写真で伝えたり、風刺漫画で社会を表したりもします。この構成は、演劇の構成ととても似ています。「壁新聞」は、演劇創作過程で迷ってしまった時に客観的に見返せる台本とも言えるでしょう。何を身体で表現するのか、どのように言葉で表現するのか。「壁新聞」は演劇をつくる過程で重要な土台の役割を担っています。

これまでの開催概要データ

2014

【前期】 2014年7月17日(休)ー8月31日(日)／全6回

講師：柏木陽、すずきこーた、吉野さつき 参加者：20名

- ① 7月17日(休) ワークショップを受けてみる
- ②③ 7月26日(土)・27日(日) 自分たちのワークショップを考えて、やってみる①
- ④⑤ 8月09日(土)・10日(日) 自分たちのワークショップを考えて、やってみる②
- ⑥ 8月31日(日) ワークショップを子どもたちとやってみる

【後期】 2014年11月22日(土)ー2015年2月07日(土)／全9回

講師：柏木陽、すずきこーた、吉野さつき 参加者：21名

- ①② 11月22日(土)・23日(日) 「まちあるき」から演劇をつくる
- ③ 12月13日(土) もう一度話を聞きに行く
- ④⑤ 2015年1月17日(土)・18日(日) 一度まとめて、足りない箇所をさがす
- ⑥ 2015年1月24日(土) 発表にむけて全員でリハーサル
- ⑦ 2015年1月25日(日) 色々な人たちに発表してみる
- ⑧ 2015年1月31日(土) みんなでふりかえる
- ⑨ 2015年2月07日(土) フォーラムで発表する

2015

【前期】 2015年7月12日(日)ー8月30日(日)／全7回

講師：柏木陽、すずきこーた、吉野さつき 参加者：23名

- ① 7月12日(日) ワークショップを受けてみる
- ②③ 8月01日(土)・02日(日) 自分たちのワークショップを考えて、やってみる①
- ④⑤ 8月15日(土)・16日(日) 自分たちのワークショップを考えて、やってみる②
- ⑥ 8月29日(土) ワークショップを子どもたちとやってみる①
～「ワークショップ緑日」にむけて全員でリハーサル～
- ⑦ 8月30日(日) ワークショップを子どもたちとやってみる②
～「ワークショップ緑日」本番 & 講座を全員で振り返る～

【後期】 2015年11月08日(日)ー2016年2月06日(土)／全11回

講師：柏木陽、すずきこーた、吉野さつき 参加者：14名

- ① 11月08日(日) 「まち」を歩く、「まち」に出会う
- ②③ 11月28日(土)・29日(日) 「聞き書き(取材の記録の方法)」をする
- ④ 12月13日(日) 「まち」に聞く、考える
- ⑤⑥ 2016年1月16日(土)・17日(日) グループ作業と中間発表
- ⑦ 2016年1月23日(土) 「まち」に聞いて考えたことを演劇にする
- ⑧ 2016年1月24日(日) 「まちに聞く、考える」発表会
「まち」に聞いて考えたことの演劇発表)
- ⑨ 2016年1月30日(土) ワークショップ及び進行についてふりかえる
- ⑩ 2016年2月5日(金) 発見したり考えたことを、色々な人たちに報告するリハーサル
- ⑪ 2016年2月6日(土) 「ワークショップファシリテーター養成講座2015」報告会

2016

【前期】 2016年7月18日(月・祝)ー8月29日(月)／全6回

講師：すずきこーた、青山公美嘉、吉野さつき 参加者：22名

- ① 7月18日(月・祝) ワークショップを受けてみる
- ②③ 8月06日(土)・07日(日) 自分たちのワークショップを考えて、やってみる①
- ④⑤ 8月20日(土)・21日(日) 自分たちのワークショップを考えて、やってみる②
- ⑥ 8月27日(土) 「ワークショップ緑日」にむけて全員でリハーサル
- ⑦ 8月28日(日) 「ワークショップ緑日」本番
- ⑧ 8月29日(月) 講座について全員で振り返る

【後期】 2016年11月23日(休・祝)ー2017年2月18日(土)／全11回

講師：柏木陽、すずきこーた、吉野さつき 参加者：8名

- ① 11月23日(休・祝) 知り合う、聞き書き(取材の記録の方法)の練習
- ② 12月03日(土) 「まち」を歩く、「まち」に出会う
- ③ 12月04日(日) 「まち」を歩いたことの報告劇をつくる
- ④ 12月10日(土) 「まち」に聞く、考える
- ⑤ 2017年1月15日(日) グループ作業と中間発表①
- ⑥ 2017年1月21日(土) グループ作業と中間発表②
- ⑦ 2017年1月22日(日) 「まち」に聞いて考えたことを演劇にする
- ⑧ 2017年1月28日(土) 「まちに聞く、考える」発表会リハーサル
- ⑨ 2017年1月29日(日) 「まちに聞く、考える」発表会
- ⑩ 2017年2月17日(金) ここまでの経験を報告するためのふりかえりと準備
- ⑪ 2017年2月18日(土) 「ワークショップファシリテーター養成講座2016」報告会

2017

【前期】 2017年7月15日(土)ー8月27日(日)／全7回

講師：すずきこーた、青山公美嘉、吉野さつき 参加者：17名

- ① 7月15日(土) ワークショップを体験する
- ② 7月17日(月・祝) ワークショップの進行プランを考える
- ③ 8月06日(日) ワークショップの進行を試みる
- ④ 8月19日(土) ワークショップ緑日で何をするか考える
- ⑤ 8月20日(日) ワークショップ緑日のリハーサル
- ⑥ 8月26日(土) 子どもたちと劇づくりワークショップをする
- ⑦ 8月27日(日) 「ワークショップ緑日」本番・講座について振り返る

【後期】 2017年10月07日(土)ー11月19日(日)／全10回

講師：柏木陽、すずきこーた、吉野さつき

参加者：17名(ベシック：13名、アドバンス：4名)

- ① 10月07日(土) ワークショップのプランニング①
- ② 10月08日(日) ワークショップのプランニング②
- ③ 10月15日(日) 聞き書き体験ワークショップ
- ④ 10月29日(日) まちあるき
- ⑤ 11月03日(金・祝) まちあるきしたことについて考える
- ⑥ 11月11日(土) 劇作りのためのグループ作業①
- ⑦ 11月12日(日) 中間発表、およびグループ作業②
- ⑧ 11月17日(金) グループ作業③
- ⑨ 11月18日(土) 全体の構成を考える、およびリハーサル
- ⑩ 11月19日(日) 「まちに聞く、考える」発表会

2018

【前期】 2018年7月21日(土)ー9月02日(日)／全7回

講師：柏木陽、すずきこーた、吉野さつき 参加者：10名

- ① 7月21日(土) ワークショップを体験する
- ② 7月22日(日) ワークショップの進行プランを考える
- ③ 8月18日(土) ワークショップの進行を試みる
- ④ 8月25日(土) ワークショップ緑日で何をするか考える①
- ⑤ 8月26日(日) ワークショップ緑日で何をするか考える②
- ⑥ 9月01日(土) ワークショップ緑日のリハーサル
- ⑦ 9月02日(日) 「ワークショップ緑日」本番・講座について振り返る

【後期】 2018年10月14日(日)ー11月18日(日)／全7回

講師：すずきこーた、青山公美嘉、吉野さつき

参加者：6名(ベシック：2名、アドバンス：4名)

- ① 10月14日(日) まち歩き
- ② 10月20日(土) 報告
- ③ 10月21日(日) どうするか考える
- ④ 11月10日(土) まち歩き、場面作り①
- ⑤ 11月11日(日) まち歩き、場面作り②
- ⑥ 11月17日(土) リハーサル
- ⑦ 11月18日(日) 「まちに聞く、考える」発表会

2019

【前期】 2019年7月20日(土)ー9月01日(日)／全7回

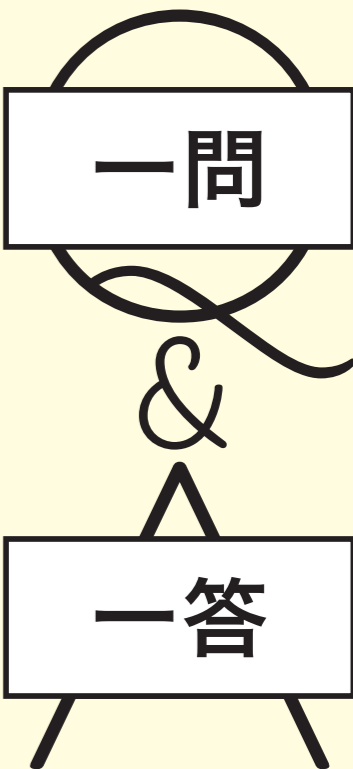
講師：柏木陽、すずきこーた、吉野さつき 参加者：15名

- ① 7月20日(土) ワークショップを体験する
- ② 8月04日(日) ワークショップの進行プランを考える
- ③ 8月17日(土) ワークショップの進行を試みる
- ④ 8月24日(土) ワークショップ緑日で何をするか考える①
- ⑤ 8月25日(日) ワークショップ緑日で何をするか考える②
- ⑥ 8月31日(土) ワークショップ緑日のリハーサル
- ⑦ 9月01日(日) 「ワークショップ緑日」本番・講座を振り返る

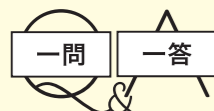
【後期】 2019年11月24日(日)ー2020年1月26日(日)／全10回

講師：すずきこーた、青山公美嘉、吉野さつき 参加者：9名

- ① 11月24日(日) 「まち」を歩く、「まち」に出会う
- ② 12月07日(土) 聞き書き(取材の記録方法)を知る
- ③ 12月08日(日) 「まち」を歩いたことの報告劇をつくる
- ④ 12月15日(日) 興味あることから取材先を考える
- ⑤ 12月21日(土) 「まち」に聞く、考える
- ⑥ 2020年1月11日(土) グループ作業と中間発表
- ⑦ 2020年1月18日(土) 取材先について深める、広がりを探す
- ⑧ 2020年1月19日(日) 「まち」に聞いて考えたことを演劇にする
- ⑨ 2020年1月25日(土) 「まちに聞く、考える」発表会リハーサル
- ⑩ 2020年1月26日(日) 「まちに聞く、考える」発表会



講師陣にあらためて聞いてみた



柏木陽

にあらためて聞いてみた

1) お名前は？

柏木と言います。

7) 講座の最中、ささやかな心の揺れ動きをていねいにすくい上げてくれますが、観察力は意識して訓練をされたんですか？

僕は臆病なんです。人の顔色を見て生きてきたみたいなのがあると思うんですね。こうした活動も、元々は演劇が好きだから始めたということではないので、人の顔色をずーっと見ちゃうんですよ。この人この時間をおもしろいと思ってるのかな？とか、こういうことやるの良いのかな？悪いのかな？みたい。なので、意識して訓練したことはなくて、そもそも自分がやってることに疑問があるから、大丈夫かなって思っで見続けてるっていうのが本当のところだと思います。

8) 講座の時、他の二人の講師より一歩引いているように見える時がありました。お仕事をすると、どんなことに注意して人や場に関わっていますか？

ワークショップみたいなことをやっていると、僕は目立つタイプの進行役だと思っんですね。場を割と自分で掌握したがるし、積極的にコントロールする方だと思っんです。でもコントロールしながら、後半は参加者同士が話すとか、参加者同士で何か進んでいくことに移行できるように意識しています。参加者の人たちが考える、疑問を持つなら疑問を持つ。その疑問に対して、自分で答えを見つけていくっていうことの手伝いがどれくらいできるかっていうことが僕の仕事だと思います。もう一つの理由は、他の2人の視点とか考え方みたいなものを皆さんにたくさん知ってもらったり吸収してもらおうことが大事だというふうに思っているんで、割と一歩引いたポジションになるというか。そこは意識していたような気はします。

11) 「まちに聞く、考える」で、まちの人への聞き書きを元に演劇創作をしました。エピソードをどこまで膨らませていいか悩みました。

ドラマティックにしようと思っし、嘘を入れちゃしようがない。分かりやすくしようと思っし整理するってのはやった方がいい。でも、分かりやすくしたいがために嘘をつきましたってことになったら、それは取材対象に誠実な向き合い方をしますか？って話になりますよね。そ

の「膨らませたい」は、何に対してどのようになのかを考えてもらいたいです。分かりやすくしようと思っしつまるなくなるのも良くない。こちらの理想像を押し付けるような改変もこちらには満足ですけど、ねえ。取材を受けてくれた方が、自分の意図と違う形でねじ曲げられたって思ったら、やっぱり悲しい思いをするだろうし、怒りも湧くと思っす。そういうコミュニケーションをしたいというなら「どうぞ」って言います。そして、やりたいならどこまでも「どうぞ」と言います、僕は。でも、最終的に殴られる覚悟もして下さねっていうことだと思っしています。

12) 人におすすめしたい映画や動画を教えてください。(インターネットがあれば手に入るものに限る)

古い映画ですけど、『天井桟敷の人々』。

19) ワークショップを続けてこられて、「よかったな!」と思っしたこと、「もうやめてやる!」と思っことがあれば教えてください。

よかったなと思っことは、演劇の仕事で生活できるようになったことです。24時間365日を演劇の仕事をして過ごすことができる。ほとんどの人はバイトして演劇してたりとか、別の仕事を持ったりすることが多いと思っんですけど、この仕事だけで生活していけるようになったことは、非常にラッキーだったなあって思っます。もうやめてやると思っことはないです。争いごととか、もうやめてくれと思っことはありますけど。

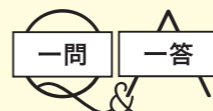
20) ありがとうございます。

はい、ありがとうございます。



柏木陽 (かしわぎ・あきら)

演劇百貨店・演劇家。93年から劇作家・演出家の故・如月小春に師事。03年、特定非営利法人演劇百貨店設立。他セクターとの協働事業を企画する一方で、ワークショップの進行役として全国各地の劇場・学校などで、子どもたちと独自の演劇空間をつくり出している。



すずきこ一た

にあらためて聞いてみた

1) お名前は？

すずきこ一たと言います。

6) ファシリテーターを仕事とするには何が必要で、何が大切ですか？

自分が生きていく上ですごく大切なものがちゃんと見えていて、尚且つそのことを客観的に見られるっていうことが、ファシリテーターには結構必要なのかも知れないなっていうふうに思っますね。ファシリテーターは、その場が適切に悩むことを促すんだと思っます。ちゃんと地に足をつけて悩む、というか。地盤が揺れてわかんなくなると、参加者も「え、どこに向かうとしてるんだ」って不安になりますよね。だから、自分が一体何にこだわってるのか、何を大切にしているのか、見えているかが大切ですね。

9) 行ったことない町に行く時、必ずやることってありますか？

散歩をします。集合時間がある時にちょっと早めに行って、その辺をブラブラと歩いてみたりします。地元であっても、この道行ってないから行ってみようみたいなことを自粛期間中よくやっりましたね。

10) どうしてそんなことするんでしょうね？

恐らくですけど、その土地にしかないものや、その土地の人たちが暮らしていることみたいなものがぼんやりと見えてくるのが僕はすごく興味があるんだなって思っんですよ。歴史を勉強してる人が、バラバラに見えていた物事が線になって繋がったり、面になって広がるとすごく面白って言いますよね。例えば古墳があるっていうことから今に繋がっている線があって、そういう線を垣間見ると面白いなことがとても面白っていうか、僕の興味はそういうところにあるので、歩くことが多いのかなと思っますね。

15) 演劇人ですか？

いわゆる演劇をやってる人からすれば演劇人じゃないって言われると思っし、でも演劇やってない人から見ると、演劇やってる人だなって思われるだろうなと思っます。どっちでもありどっちでもないのかなって気がして、でも僕自身は演劇をやってる人だっ

て思っます。

17) 講師、司会、まとめ役、リーダーと、ファシリテーターはその時々に変化(へんげ)していたように思っました。ワークショップファシリテーターとは何者なのでしょう？

参加者が自分たちでいろいろ考えたり、表現することを促していくっていうのが仕事だと思っしています。前に柏木さんとも話したことがあるんですけど、「僕らは塩みたいだな」って(笑)肉っていうのは肉自体でもうまい訳ですよ。だけど、塩をバツてふるとものすごくうまくなったりする。でも、それは元々の肉がうまくないとうまくなれない。逆にかけ過ぎてうまくなれない。その肉っていうのは参加者のみなさんだと思っのね。花に水をやって伸びるっていうのも同じかもしれないけど、もともと持っている力があるはずで、僕らはちょっとだけ方法を手渡す。それは必ずしも使わないといけないわけではないんですけどね。

18) この講座以降、ファシリテーターとして何か変化がありましたか？

元々「養成する」っていうことに興味がなかったんですよ。なんでこんなおもしろいことを人に渡さないといけないんだって。でも、たまたま出会いがあって、たまたまちょっと頑張ってやってみようとした時、たまたま参加した受講生の人たちがすごく素敵な人たちばかりで、彼らが自分で成長していこうとしている過程を見て、ファシリテーターを養成するのもまんざらではないなと思っました。自分が大切にすることや、思ってることを誰かに伝えていべきかなって思っ始めた、ってところが一番変わったところかなって思っます。

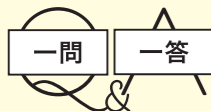
20) ありがとうございます。

ありがとうございました。



すずきこ一た

演劇デザインギルド理事・ワークショップファシリテーター・俳優。演劇の手法をさまざまな場面に取り入れたワークショップを数多く進行。小中高で演劇を取り入れた授業も多く、先駆的な手法は高い評価を受けている。目白大学非常勤講師。



青山公美嘉

にあらためて聞いてみた

1) お名前は？

青山公美嘉です。

3) 今日は何してましたか？

正直に答えると、今日は夫がお休みだったので、お昼ぐらに起きて「お寿司を取ろう！」ってなって、お寿司を取って3人前を仲良く分け合って食べて、テレビで中国のドラマ・紫禁城の第7話を見てました。

9) 行ったことない町に行く時、必ずやることってありますか？

あのね、不思議だなと思うのは、旅行に行ったとき朝必ず散歩するの。気持ち良いなと思って、ホテルの周りとかでもいいんだけど。で、さわやかな空気を吸うんだけど、なんで東京にいるときは一切やらないんだろうってすごく思う。毎日やればいいのに私。

10) どうしてそんなことするんでしょうね？

なんでだろうね、気分が高揚してるんじゃない？（笑）「この街にすることが素晴らしい！」みたいな気持ちが急に燃えてきて歩こう！みたいな気持ち？（笑）小学校1年生の初めての登校みたいな気持ち。「わ～たのしい～！」みたいな。日常になったら急にどうでもよくなる（笑）

17) 講師、司会、まとめ役、リーダーと、ファシリテーターはその時々に変化（へんげ）していたように思いました。ワークショップファシリテーターとは何者なのでしょう？

演劇ワークショップをやってない人には「先生」って言う。それが一番分かりやすい言葉だから。でも、教

えないから絶対に先生じゃないんだよね。何か教えている訳じゃないから絶対に先生じゃないんだけど、でもやっぱり一番分かりやすい言葉が「先生」なんだと思う。でも、先生ではない！先生ではないぞ！しかし！

18) この講座以降、ファシリテーターとして何か変化がありましたか？

それはね、あったと思う。どうやってサポートしていけば良いんだろうっていうことを考えるようになった。今まで、アシスタントとして来る人っていうのは、冷やかしてくれれば良いと思ってた。冷やかしておかしいな。その場において、私の助けをしてくれれば良いと思ってたんだけど、そうじゃなくて、この人（受講生）が今度は1人で出来るようになるために、どういうアシスタントを私が出来るんだろうっていうことを考えるようになった。大人になったねえ。

19) ワークショップを続けてこられて、「よかったな！」と思ったことと、「もうやめてやる！」と思ったことがあれば教えてください。

辞めたいって思ったことはないかも。思ったら多分辞めてると思うね。

良かったことはいっぱいありますよ。演劇が好きで、誰かと出会うことも好きで、どっかに行くこともすごく好きで、それが全部出来てお金貰えるんだよ。こんな人生幸せでいいの？最高じゃん。好きなことを職業にしてるから良かったことばかり。

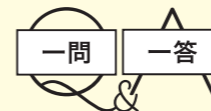
20) ありがとうございます。

ありがとうございます。



青山公美嘉（あおやま・くみか）

桐朋学園大学短期学部芸術科演劇専攻にて演劇を学ぶ。99年に渡英し大道芸人として活動。帰国後、演劇百貨店のワークショップに進行スタッフとして参加。2007年度より東京都立若葉総合高校で、非常勤講師として演劇の授業を担当している。



吉野さつき

にあらためて聞いてみた

1) お名前は？

吉野さつきです。

4) 私は小学3年生です。「ワークショップファシリテーター」って何ですか？

いろいろな人たちがいっしょに何かを作ったり、遊んだり、話し合ったりするためのやり方を考えて、その人たちといっしょにやったり、困っていたらちょっと助けたり、反対にわざとちょっと困ることも言ったりして、でもそれを楽しく面白くしたりもする人、だと思います。

12) 人におすすめしたい映画や動画を教えてください。（インターネットがあれば手に入るものに限り）

「パンク・シンドローム」という映画はおすすめです。フィンランドの知的障がいのある人たちによる、パンクバンドのドキュメンタリー映画です。パンクでクールでファニーでアナーキーで、バンドのメンバーがそれぞれ超魅力的だし、彼らの言葉も深くてカッコいいです。大学の授業でも見せてます。

13) 豊橋でおすすめのものは？

ちくわ？（笑）あと、山安の海苔！駅ビルにあるお店で月初めだけ限定で売ってる、切れ端みたいな部分を缶に詰めて、300円くらいで売ってるやつ。お得で美味しいの。

15) 演劇人ですか？

演劇の定義がどこまでなのか分からないけど、ちがうんじゃない？そう思ってた時期はあるけど、今は〇〇人みたいなカテゴリー自体がいらなくて思ってる。

16) 演劇の限界を感じることはありますか。それはどんな時ですか。

複製ができないっていうとこかな。それは良さでもあるし、弱点であるかもしれないし。限界かどうかはわからないけど、人間がやってる演劇にできないことがあるとしたら、完全な複製を繰り返すってことじゃないですかね。

18) この講座以降、ファシリテーターとして何か変化がありましたか？

演劇にしるダンスにしる、芸術は専門の特別な人たちだけのためにあるものではない、っていうのを改めて実

感するようになった。元々そう思ってたけど、よりそういう思いが強くなったし、専門の人の表現が上で、そうではないような人たちがやる表現は下とかいうことは全然なくて、多様な表現が多様なあり方でそこにあるだけだあって、前よりクリアになったと思います。

19) ワークショップを続けてこられて、「よかったな！」と思ったことと、「もうやめてやる！」と思ったことがあれば教えてください。

よかったなと思ったことは、いろんな人に出会えたこと。いろんな人の人生とか、生き様みたいな、そういうことが透けて見えてくるようなとてもいろいろな素敵で深い表現に出会えたこと。それから、そういう表現が生まれてくる瞬間、そういうものが芽をばっとうしたり生まれるところに、たくさん立ち会えたのはすごい幸せなことだと思ってます。

主催者とうまくいかないとか、最初に聞いてた話と違うとか、あまりに不条理なことなのではないかって思った時には、「えーい！」みたいな気持ちになることはありましたね。でも、辞めてやるって思ったことはないですね。

ワークショップの場はクローズドなものも多いし関わる人数も少ないことが多いし、だから、そこで生まれる表現に出会えることや生まれる過程にも関わる事ができるのってすごい贅沢だなとも思ったのね。さらに、マネジメントの仕事って、ともすると自分は創作や表現する立場じゃなくてその場を影で支えます！みたいな方に行ってしまうがちだけど、ワークショップの場をつくる仕事は、どこか自分がもっとその場に踏み込んでいる感じがしたんですよ。

贅沢だし、こんなに楽しいことはないって思ったから、それを辞めたいって思ったことはない。

20) ありがとうございます

はい！おつかれさまでした～。



吉野さつき（よしの・さつき）

愛知大学文学部メディア芸術専攻教授。英国シティ大学大学院でアーツ・マネジメントを学び、公共劇場勤務、英国で研修（文化庁派遣芸術家在外研修員）後、コーディネーターとして教育、福祉等の場で芸術を用いた活動に携わる。劇場や芸術団体によるアウトリーチ事業、コミュニティアーツプログラムやアーティストによるワークショップのマネジメントを担う人材育成にも各地で携わる。異ジャンルコラボバンド「門限ズ」メンバー。

だれもとりにぼされない場が
成り立つためにファシリテーターに求められる
在り方・関わり方は、ワークショップだけでなく、
まちでの暮らしにもプラスのようだった。

～劇場のワークショップファシリテーター養成講座～

発行日：2021年3月

発行：公益財団法人豊橋文化振興財団（穂の国とよはし芸術劇場 PLAT）
〒440-0887 愛知県豊橋市西小田原町123番地
TEL 0532-39-8810 FAX 0532-55-8192 <http://toyohashi-at.jp>
制作担当：大橋玲、加賀茅捺、塩見直子（穂の国とよはし芸術劇場 PLAT）

編集：鈴木一郎太

デザイン：坂本陽一（mots）

協力：柴田公代、本田信英、山田久子、山本友香（敬称略）

取材協力：

2014年 花園商店街、菊の湯、水上ビル、アトリエマルエス

2015年 自転車預かり所、日の丸や、NPO法人フロンティアとよはし、鈴木捺染

2016年 石川繊維資料館、牛川の渡し船、エフエム豊橋

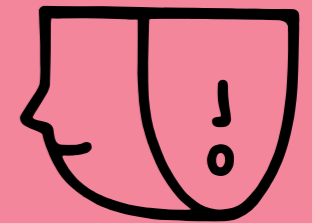
2017年 コンドーバン、日本語教室、NPO法人表浜ネットワーク、
芳賀織布工場有限会社、愛知大学公館前で絵をかいていた方

2018年 杉江圭一さん（豊橋空襲について）、豊橋養鶏農業協同組合、豊生ら・ぼるか、
御幸神社「花祭」幹事会、料理道具専門店 TAKATSU

2019年 豊橋シティプロモーションアドバイザー・鈴木恵子さん、魚町商店街の靴店、
豊橋中央図書館専門員・岩瀬彰利さん、日比野食堂

主催：公益財団法人豊橋文化振興財団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）| 独立行政法人日本芸術文化振興会



TOYOHASHI ARTS THEATRE

PLAT

詭弁だと言われたとしても、「ワークショップの場は進行役も含めた参加者全員でつくる」ということを私は大切にしたい。

誰かひとりが場をつくるのではなく、みんなでつくる。参加者が自分を大切にするのはもちろん、他の人も大切にしながら、その場にいる。

それによってワークショップの場が成り立っていく。そんなふうに思うのです。

すずきこーた